

会報 第21号

2020年3月31日
NPO 法人日本文化塾

今年の春は例年になく訪れが早く、花も早く、年度も無事終了かと思っていた矢先に、新型コロナウイルス肺炎流行のニュースに襲われました。社会活動が制限されるなか、相手が目に見えないだけに、どのように暮らせばよいのか、なかなか難しいのが実感です。皆様はいかがお過ごしでしょうか。

☆2019 年度 6 月以降の活動報告

*HP 上に参加者の貴重なご感想や当日の写真を掲載しておりますので、終了後逐次ご覧ください。 <http://www.nihonbunkajuku.org>

講演会：本居宣長「歌道」と「古道」

6月22日(土) 14:00~16:00 @きゅりあん 中会議室
丸山真男政治思想研究所 金子 元氏

当日のお話は「逆説の思想家、本居宣長」として本居宣長の再評価を試みようとするものでした。その逆説とは、講師によれば5点あります。①非常に緻密で実証的な考証とされるのに対して、排外主義的な言説が散見される。②理屈でなく素直な「うたごころ」に対し、極めて理性的な考証と先鋭的な論争。③歌の学びの重要性を言うのに対し、実は彼の歌は評判がよくない。④天照大神の跡を継ぐ天皇による統治の称揚に対し、実は父帝の后との不義の子が帝位に就く物語を絶賛していること。⑤「からごころ」混入以前の日本本来の姿を『古事記』に見出すとするのに対して、歌学においては古今・新古今を理想としていること。以上五点です。

講師は、宣長の生涯をたどりながら、こうして、定説とは異なる彼の実像を探っていきます。宣長がその学問の中で生み出したものとたたかったものを明らかにすべく、一) 先行する国学者、二) 儒学(朱子学)との関連、三) 『古事記伝』と神話世界の順で近世思想史における位置づけを行い宣長の歌学と宣長の古道論を紹介されました。さらに、彼の背景である江戸期の社会に具体的に位置づけられて、お話を終えられました。多くの著作中の宣長の主張を引用し、興味深いご指摘もありましたが、非常に専門的なディテールに及んでいて、素人である筆者は、最後まで付いていくことが難しかったのが悔やまれます。結局、「逆説」とは何だったのか、改めて金子先生に語っていただきたく思いました。(S)



講演会：縄紋時代の考古学

9月21日（土曜日）@玉川区民会館 集会室B

中央大学文学部日本史学専攻 教授 小林謙一氏

「縄紋」は一般的には「縄文」が使われるが、講師は、本来は地紋としての縄目の模様を言うので「紋」の字を用い、「縄紋」「貝殻条痕紋」と「渦巻文」「区画文」を使い分けるとのことである。最初に、定説として高校教科書に載っていることと、歴史的事実の違い、つまり、現在分かっている事実に照らして明らかになった定説の間違いについて話された。それは、道具（打製石斧と磨製石斧、青銅器と鉄器）から見た縄紋時代の始まりと、弥生時代の始まり（縄紋時代の終わり）の年代区分にかかわる大きな問題で、聞き手にとって、まさに目から鱗の感があった。縄文の始まりは、氷河期が終わったあと訪れた温暖化のなか12000年前とされてきたが、実は16000年前既に縄文土器が出現していて、4000年もの前倒しが必要である。また、縄文の終わり、弥生時代の始まりの年代については、水田跡の確認からBC400年ごろとされてきたが、今では、大陸から稲作がもたらされたのは、BC900年ごろ、大陸で殷・商が滅亡した頃とされており、これも大幅な時代区分の見直しが求められているのだ。また、編年的に早期、前期、中期、後期、晩期と経過し、文化として熟してきたと言われていた縄紋土器の文化は局所的に栄えたと捉えられる。5000年前、甲州～相州にかけて最盛を誇った勝坂式土器文化（中期）が典型である。例えば、東北地方の亀ヶ岡式土器文化に見られると言われてきた漆の文化については、発掘された是川櫛が約9000年前の中期に遡れ、その漆器の原木は約12000年前まで遡れるとのこと。縄文人＝原始人との筆者の思い込みは根底から覆された。筆者が、そのような目で縄紋文化を見直してみると、中期の火炎式土器や、すらりとした土偶の姿に、その時代の高い芸術性や作り手の個性、それを生んだ文化のレベルの高さを覚えずにはいられない。大量に同じものが出てこないのも、そのようなわけがあるのかもしれないと思ったりした。

さて、以上のような年代の決定は、考古学では炭素14年代測定法によって行われる。縄文人が食料としている動植物の炭素を測定し、時間経過によって崩壊する炭素14の量を調べることで年代を決定する方法である。これによって、過去、相対的順序しか分からなかった土器の変化が20年から100年のスパンであることも判明し、土器製作のシステムや世代間伝承の解明にも繋がった。文化が安定しているときには、同じ紋様が長く続くという。講師は次に、具体的に、中期の勝坂文化の集落の分析を展開された。集落は南北16km、東西20km、現在の目黒区大橋、蛇崩川流域、世田谷、多摩地域に重なる。約1000年間およそ100集落の遺跡があり、住居跡は404軒確認されている。植物の栽培管理を行い、栗林も作っていた。集落は次第に漁業文化である愛宕台文化圏に入り込んでいくが、土器の広がりや200年間で約100km、年平均にして500mということになるから、かなり安定した社会だったと思われる。

次に、武蔵野台地東部の人口動態をみると、縄紋文化は環境変動（気候変動）に弱かったのではないかと、という仮説が成り立つ。温暖な気候のうちに穏やかに栄えた縄紋中期だが、中期末後期初頭には大きな変動がくる。BC3200～2650ごろまで増加していた人口がBC2590頃急減するのだ。この時期は気候の乾燥期に当たる。さらに、BC2560～2285には人口停滞期として推移した後、BC2130以降、次第に回復傾向となる。それぞれの時期には、顕著な特徴が見られる。まず、人口増加はBC2750頃ピークに向かうが、この頃の遺跡に従来の見られない埋甕（新たな住居の形式で、入り口または中央に埋甕する。胎児・小児の埋葬か？）と大型石棒（武器？）が伴う。これらを、人口調整のあとと考える。人口許容量に近づいたためか、または集落が大きくなって近接したための社会的圧力（闘い？）の結果なのだろうか。いずれにしても、厳しい現実である。次に、停滞期だが、この時期に環状

集落が解体し、新たに敷石住居が現れる。関西系土器群の流入も続く。人口回復期に入ると、貝塚が復活し、乾燥期が終わったため低湿地ができ、そこに盛土して大型配石する遺構が現れる。環境変化の中、講師が大好きだとおっしゃる縄紋人は、変容したのだろうか。

講師は今の縄文時代考古学の専門家を代表する研究者。今回そのような方をお迎えできて、この上ない光栄なことであった。参加者を一般に広く募集して、たいへんレベルの高い聴衆にお集まりいただくことができたのも、うれしいことだった。

(K)

(K)



☆新型コロナウイルス流行の今春、皆様は、ご無事に春をお迎えでしょうか。

いつになれば、元通り生活できるようになるのか、不安は拭えません。

ともあれ、今年度も皆様のお力添えをもちまして、幕を閉じることができます。心からの感謝と共に、引き続き温かいご指導ご鞭撻をいただけますよう、よろしく願いいたします。

☆来る4月25日（土曜日）令和元年度定例総会を行います。

ですが、新型コロナウイルスの流行が収束に向かうものか、この節の自粛ムードの中、予定通り実施できるかどうか、見極めることがたいへん難しい状況となっております。総会通知をお届けするまでには、決めたいと思っていますので、なにとぞご理解くださいますよう、お願い申し上げます。

☆同日に第59回の講演会を予定しておりましたが、この節の自粛ムードの中、いつまでどのように生活すればよいものか、なかなか見通すことが難しく、理事会で検討の結果本塾では諸行事を五月連休明けまでお休みすることといたしました。大変申し訳なく存じますが、やむを得ない決断ということを、皆様ご理解くだされば、幸いです。

☆皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(理事会一同)



☆新型コロナウイルス流行の今春、皆様は、ご無事に春をお迎えでしょうか。

いつになれば、元通り生活できるようになるのか、不安は拭えません。

ともあれ、今年度も皆様のお力添えをもちまして、幕を閉じることができます。心からの感謝と共に、引き続き温かいご指導ご鞭撻をいただけますよう、よろしく願いいたします。

☆来る4月25日（土曜日）令和元年度定例総会を行います。

ですが、新型コロナウイルスの流行が収束に向かうものか、この節の自粛ムードの中、予定通り実施できるかどうか、見極めることがたいへん難しい状況となっております。総会通知をお届けするまでには、決めたいと思っていますので、なにとぞご理解くださいますよう、お願い申し上げます。

☆同日に第59回の講演会を予定しておりましたが、この節の自粛ムードの中、いつまでどのように生活すればよいものか、なかなか見通すことが難しく、理事会で検討の結果本塾では諸行事を五月連休明けまでお休みすることといたしました。大変申し訳なく存じますが、やむを得ない決断ということを、皆様ご理解くだされば、幸いです。

☆皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(理事会一同)



企業博物館見学会：(株)電通「アドミュージアム東京」

2月15日(土) 13:30~

今期の企業博物館見学会は15名定員のところ、13名の参加者を集め、2月15日午後1時半から、汐留にある「アドミュージアム東京」にて実施されました。この博物館は、日本初の広告とマーケティングのミュージアムとして、(株)電通が、広く一般に広告の社会的、文化的価値への理解を深めることを目指して開館したものです。

当日は、ミュージアム解説員後藤昭男さんのご案内で、江戸~明治~大正~昭和~現代に至る日本の広告の歴史を大型パネルを通したご講義によって学ぶことが出来ました。

錦絵の中に広告の部分がパズルのように組み込まれた江戸時代、文明開化と共に印刷技術が発達し、近代広告史の幕開けとなった明治時代、モダニズムが開花し、今なお色あせない表現やクリエイターが誕生した大正時代、戦前~戦中~戦後で広告に映る光と影が鮮明

な昭和の時代、そして、「モノから心へ」と感性に訴える現代、その変貌の過程を、録音を交えながら追う45分間の解説は解りやすく興味深いものでした。

自由解散後のひとは、時代ごとに区分された数々のポスターを懐かしさと共にゆっくり見て回る会員、解説員との会話を楽しむ会員、広告を体験できる試聴ブースの前で立ち止まったり、ライブラリーで関連図書を閲覧する会員の姿が見受けられ、「広告ってやっぱ面白い」と壁に映し出されたフレーズを再確認しながら、15時前、無事終了しました。

(MK)



☆NPO 法人には、収入の20%を一般からのご寄付で賄うという規定があります。

日本文化塾は、より多くの皆様のお支えをお待ちしております。

お申し込み・お問い合わせは→ secretary@nihonbunkajuku.org

逍遙 (13)

秋川街道と日奉(西)党の郷を探る

伊藤 完

私は「歴史古街道団」という鎌倉街道とか旧東海道などの古街道を探索するグループに属していて、何回か道を探るウォーキングガイドをしています。

今年始めて、「桑都(八王子の別称)あるきその5」と題し、2020年2月22日、2が続く日に30名を超えた皆さんをご案内して八王子市川口地区の散策ウォークを行いました。八王子の(地形について会報19号で書きました)丘陵には縄文遺跡、古墳、谷間には弥生、奈良、平安、の遺跡郡があります。

コースは、高尾駅に集合してバスで宝生寺団地(旧角栄団地)行きのバスで宝生寺に着きます。資料の説明、注意事項などの話をしついでにスタートです。宝生寺は真言宗智山派に属し、開山が応永32年(1425)で此処には中村雨紅の夕焼け小焼けの文化碑があります。「下げ坂」(八王子城落城の折豊臣軍が北条武者の首を下げて帰陣した坂)を通り、調井地区畑の中にある川口兵庫介館跡に入ります。川口(河口)氏は、武蔵七党の一つ日奉党(西)党に属し畠山重忠とともに初期の鎌倉幕府に貢献し、その後この地域の地頭となり豪族と

して栄えました。日奉党の日奉りとは暦を司る日奉部で藤原鎌足の子孫になるそうです。その一つ由比氏は「由比の牧」を治め大和朝廷との関係(馬を納める)を深めていました。また義経の一ノ谷の合戦で有名な平山季重もおりました。八王子にはもう一つ武蔵七党の横山党があり、吾妻鏡に出てくる活躍をしていましたが和田義盛の乱(1213)で滅亡します。平安時代からこの地域(八王子西北部、長房も含む)は**船木田荘**と呼ばれ九条藤原氏(後に寺院)の荘園でした。荘園を管理することで武士が台頭し、地域の民衆をまとめて文化を構成してきました。

さて、コースは安養寺に向かいます。途中「河井宗兵衛」「米山誠一郎」明治昭和に貢献した住民の碑がありました。**安養寺**は真言宗、永和年間(1379 頃)開山で境内に農民運動指導者「**塩野倉之助**(1828~1907)」の「困民党党首」碑があります。次に訪れたのは**法連寺**です。八王子には現在2寺しかない時宗で開山は嘉元2年(1304)鎌倉末期です。甲斐武田との関係も深く一時は信玄の孫娘(仁科小督)も滞在しました。そして本堂で一遍上人像、涅槃図などの文化財を見せて頂きました。このお寺には元ファンキーモンキーベイビーズのDJケミカルさんが住職のお父様とお勤めをしております。近くに萩寺とも呼ばれる**長福寺**になります。真言宗智山派に属しますが**鳥栖観音堂**の名で通り、寛永2年(1625)の開山です。昼食は八王子市の施設川口事務所の会議室でレクチャーと称してお弁当タイムです。川口事務所の裏の丘陵は縄文中期の**宮田遺跡**があり、日本で初めての乳呑み児抱いた土偶が出土しました。「子抱き土偶」として現在は佐倉市の国立歴史博物館に収められている貴重な文化財です。

午後は(解説省略します)**龍正寺**(1577 開山)、**長楽寺**(1187 開山)、**三光院**(1383 開山)と巡りました。途中、**北村透谷**(1868~1894)の「**三日幻境**」碑に立ち寄りしました。ここ「森下」地区は川口村在住の**秋山国三郎**と透谷の親交の地で、多摩自由民権運動の要地になりました。

この日のウォークはお寺巡りのようになりましたが、開山の年を入れましたので、いかに古い郷か、お分かり頂けると思います。八王子でも狭い川口地区でしたが、平安末の武士から明治の自由民権運動まで、この地域に残された文化に触れた思いです。

心からの京のおもてなし



須澤晃

私は、仕事の都合で足掛け10年、京都・烏丸御池に住みました。場所柄、美味しくお料理をいただく機会に恵まれましたが、いずれも量や見せかけ、パフォーマンスで勝負しない、おもてなしの心が伺えました。おもてなしとは、“お持て成し(Hospitality)”で、「“もの”を持って成し遂げる」ことでもあります。この“もの”とは、動作に添える言葉であり相手を慮る所作です。“成す”とは、良い意味での相手の期待を裏切ることです。そして、おもてなしが単なるサービスと異なるのは、見返りを求めず相手を敬い丁寧に接することです。おもてなしには、もう一つの思いがあります。それは“表裏が無い”、つまりおもてうらがない、おもてがない、おもてなしという訳です。そのようなおもてなしのためには、より高い教養と品位ある接遇が必要なのです。京都では、このことを伝統的に意識するが故に、気位が高いとか排他的だといわれるのでしょう。

しかし、京のおもてなしには、それなりに理屈があり理由があります。その理屈や理由を相手に悟られず、期待を裏切ることも、伝統文化に染み込ませているようです。

例えば、京都には6つの花街があります。上七軒・祇園東・祇園甲部・宮川町・先斗町・嶋原です。花街には、舞妓と芸妓が共同生活をしています。舞妓は、芸妓の見習い身分で修行中で、芸妓になって初めて芸事で収入を得て、給与を得ることができます。舞妓は、

15歳から20歳までの間、所属する置屋の女将（おかあはん）は、毎日の食費、着物や帯代、髪結いや化粧代、衣食住にかかる費用など、舞妓の生活にかかる全てのお金を出資します。そのため、舞妓として“もの”になるまで、本当の京のおもてなしができるまで育てた舞妓や芸妓を守る義務があるのです。芸妓や舞妓を電話1本で呼べないのは、おもてなしの完成成就のための、いわば投資した“もの”への保険でもあるのです。京のおもてなしは、その背景に伝統を守らんとするこだわりとプライドがあります。

京文化の渦中で苦しみ、料理人プライドの典型のような北大路魯山人の言『器は料理の着物である』とは、おもてなし料理と器へのこだわりであり、おもてなしの神髄です。

京の料理のひとつに「おばんざい」があります。おばんざいとは京の言葉であり、大阪ではおかずとも惣菜とも呼ばれます。おばんざいは漢字では「お番菜」です。番の文字には、日常的なとか、粗末なとか、うちうちといった意味があり、質素儉約の慎ましい暮らしで育まれてきた料理のことです。粗末なうちのお惣菜を、看板にはお番菜とせず、おばんざいとしておもてなしするのは、京都人の思いやりであり、お番菜ではお代をいただけないからのしたたかさからでしょう。

ちなみに、お代をいただくのは「ご馳走」です。「馳」は駆ける、「走」は走るのです。ご馳走は、韋駄天様が、お釈迦様のおもてなしのために、食材や器などを駆け回り走り回って集める姿から、ご馳走なのです。お釈迦様の“甘露、甘露！しあわせじゃ”と、お声が聞こえるようですね。

京のおもてなしとは、『高い教養と品位ある謙虚な接遇で、信念をもって心からの接待をする』という奥深い文化です。

新入会員募集中です。お友達をお誘いください。



身近な歴史 個人の歴史 お家の資料



近世日光と申橋家の謎（四）

申橋家関係文書を読む

* 無断転載を禁じます

V 輪王寺宮近くに仕えた250年

甲州武田氏に仕え、猿橋郡を領地としていた猿橋氏（鈴木氏）は、理右衛門道秀のとき改名し申橋右京道秀を名乗り、（その後も文書中には「申」または「猿」の文字で現れるがその意は変わらない。）以降輪王寺宮家家臣となった。すなわち、武田勝頼の没後下野国小山に居住していたところ、慶長13（1613）年、天海僧正が日光東照宮座主として京都から関東に下るときに召し出され、供奉して日光に至り、鉢石（現鉢石町）に屋敷を拝領、以後幕末まで10代、宮家に務めることとなる。初代より墓所は日光観音寺であるが、東叡山坊官^{注1}となって江戸に住むようになった9代と、次の10代だけは当初浅草長遠寺に葬られていたようである。現在は（おそらく子孫の手で？）観音寺に移されている。

申橋家の役職は3代市郎右衛門吉隆から8代主計隆寛まで、関東の門跡寺院輪王寺宮家御納戸役であった。御納戸方とは、もともと將軍家の役職を模して大名家にも設けられていた役職名で、幕府では將軍の衣装や調度品の管理、賜与する褒美金等の金銀の取り扱いを

預かる若年寄支配の役所であった。輪王寺の宮家では、御納戸役の名称のもと、関東の武家同様の職として宮家の財産管理の重要な役を務める部署であったと考えられ、申橋家当主は代々の宮の非常に近くに仕えて、私的にたすける役割も担ったと思われる。史料的にも、宮がこの家の子弟を御近習として傍におき庇護を与えていた様子が散見される。天海僧正直々の紹介による仕官だったことが、固い信頼の基であったのは確かである*。

実際の任務はどんなものだったのか、観音寺の墓誌を頼りに覗いてみよう。明和4年(1767)十月家督相続した第7代^{注1}の主計隆庸(8代隆寛、宮御用人奥野近江守昌忠の実父)は、寛政8年(1796)五月に御納戸役を仰せつかり、文政元年(1818)まで務めあげて、この年8月隠居を願い出て御役御免となっている。没年は文政12年(1829)なので、隆庸の隠居生活はかなり長いことがわかる。跡を継いだ第8代^{注2}隆寛はこの時34歳であった。寛政11年(1799)元服して御目見え。翌年御供番見習いとなり、寛政13年には本役。文化5年(1808)七月、新宮の10代舜仁法親王をお迎えのため上京の列に加わり、翌年中奥格御近習格。文化10年(1813)宮の上洛供奉。これより御近習本役となり、15年には上野御納戸役加勢となる。本役となった二年後の文政元年(1818)8月、父の願いにより日光に帰って、家督を継ぎ御納戸役となる。元服以来、奥部屋住19年と記されていることから、隆寛の元服は15歳だったことがわかる。この間、宮の近くにおいて、江戸と日光、また京都を往復していたと思われるが、江戸にいた文化11年(1814)上野御殿において舞楽と笛の稽古を受けた記録も残っている*。^{注3}

隆寛の実弟守忠は、宮家御用人奥野近江守家に養子として入っており、その子は男子のなかった隆寛の養子として申橋家第9代^{注4}隆恭となる。9代は官位を賜って従五位伊豆守として東叡山の坊官を務め、京都中島家と縁を結んだ。今回は、この第9代と、戊辰の上野戦争で宮を守って戦った第10代^{注5}主計隆美をご紹介します。(虎)

^{注1} * 坊官：御所や門跡寺院に仕えた在家の僧。起源は宇多天皇のとき。大臣、殿上人等の身分の高い者の子息が務めた僧形の士。すなわち、剃髪し僧衣に白袴を着して帯刀し肉食妻帯も許されていた。
^{注2} * 前号で明らかにしたように、天和2(1682)年に東照宮社家の間に争いが起こった折、申橋家の血筋を引く信政を新たに社家に取り立てたことにも、それが顕著に表れている。
^{注3} * 出典は『楽所録』（四天王寺大学紀要第55号所収南谷美保氏論文による）

<p>☆来年度の予定</p> <p>6月18日(土) 14:00-16:00 @世田谷区砧区民会館</p> <p>講演会：映画『ゴジラ』から見る戦後史私観—『ゴジラ』から『シン・ゴジラ』まで 講師 寺島 正芳氏 (映画史研究家)</p> <p>9月 企業博物館見学会 (詳細未定)</p> <p>11月 滋賀歴史探訪(一泊) 近日お知らせします。</p>

 編集後記

年度末を活動延期の残念なお知らせとお詫びで納めるのは、とても心苦しいのですが、今号は、会員からの素敵なお投稿に恵まれ、落ち着いた気持ちの中に暖かい火がとまり

ました。東京のお花見会は禁止されましたが、桜の開花は例年になく早く、せめて散策しながら、花のもとで心とらぐひと時を過ごしましょう。

写真は、前号に続き、荒川副理事長家の朴ノ木です。

(虎)

